

書 評

武智 秀夫・明石 謙 著

義 肢

石田 肇 (日本医科大学名誉教授)

この度、日頃敬愛する武智秀夫、明石謙両先生による『義肢』が出版されるに至ったことは誠に御同慶に耐えない。両先生は本邦のリハビリテーションのパイオニアとして常にその指導的役割を果たし、1968年と1972年に出版された名著『義足』と『義手』の2冊は、当時この方面の著書が乏しかった時にまさに乾天の慈雨のごとくに我々の知識欲を満たし、臨床の場においてバイブルとして活用されてきた。今回はこの本を基にして新時代に即応して大改訂をされ、1冊に纏められて『義肢』として出版された。本書は5つの章、すなわち総論、義手、上肢切断のリハビリテーション、義足、下肢切断のリハビリテーションの大項目からなり、いずれの項目も原理的な問題を理論的に分かりやすく、また古典的な理論と現代のハイテクノロジーについても対比しながら正確に記載されている。それもそのはずで、武智先生はかつて義肢学のメッカであるドイツハイデルベルグ大学で切断、義肢についての研鑽を積み、また特にその優雅なご趣味は医学史、森鷗外に御造詣が深く、この方面の御高説には敬服している。またチェロを演奏される。他方、明石先生は、米国リハビリテーションの中心的役割を果たしたラスク教授のいたニューヨーク大学リハビリテーション医学研究所で最新のリハビリテーションを研鑽して専門医の資格を取られ、その後、本邦の数少ないリハビリテーション医学の教授として研究に、教育に、臨床にご活躍され、ご趣味のヴィオラはプロなみの腕前であり、武智先生のチェロに他のメンバーを加えてトリオやカルテットを合奏されていると聞いている。したがって、気心もピッタリで、2人がそれぞれの得意な部門に筆を振るわれた結晶が本書であり、本書

の改訂も極めて円滑に進んだものと思う。本邦の切断者のリハビリテーションは画期的な進歩をとげ、1989年には国際義肢装具連盟の第5回世界大会が開催されるほどになった。今回の改訂でも『わが国の義肢の歴史の変遷』についての興味深い記載があり、また『義手と義足のちがひ』の項目で Engels, Kart, Schlesinger や Goethe などを引用されて手の感覚器官としての重要性を強調されている。総論においては切断、義肢のみならずリハビリテーション一般の理念を理解することができる。特に切断者の心理的問題は、障害の受容と動機づけ、その後のリハビリテーション推進に当たって示唆に富む項目である。義手の項目では、そのアライメントと体外力源の義手の項目が、中でも特にフィードバック機構についての記載が斬新な感じがした。いずれも適切な絵ときで理解しやすく工夫されている。各義手の適合判定の項目も患者を眼の前にした実践的なもので、そのテスト法なども実際にこの方面を手がけた人でないと書けない部分であろう。義足に関してもソケット、継手、アライメントに関して実に懇切に分かりやすく記載されている。Burgess の術直後義肢装着法の開発以来注目されてきた骨格義肢の記載も裨益するところの多い項目である。本書の最後に見られる義足処方例はわずか1ページであるが、実際に処方する場合に大いに参考になると思う。全体を通して感じたことは、読みやすく理解しやすく、かつ手頃な実践的な書で、その膨大な適切な絵ときに対して心から敬意を表したい。医師のみならず理学療法士、作業療法士ならびに義肢装具士などのコメディカル専門家の座右の書として推薦したい。(B5判 302頁 9,991円(税込) 1991年 医学書院刊)